375.9
M014
資料室

高等科國語 二

第一學年後期用

文部省

50561
教科書文庫
5
810
33-1946
20000
26538

375.9
M014

高等科國語　二

目次

資料室

一　知識と迷信……一
二　感知……三
三　りすを育てる……九
四　實物とその模型……二十五
五　雪の映畫……三十六
六　二宮金次郎……三十八
七　少年筆耕……五十一

廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島文學教
26538
圖書

一　知識と迷信

種々のものごとをわきまへ、その間の道理を知ることを知識といふ。知識は、人から教へられたり、自分で本を讀んだり、考へたり、調べたりして、しだいに增してゆく。一人まへの人として、自分のつとめをはたしてゆくには、多くの條件がいるが、知識を增すことは、そのもつとも大きなものの一つである。

知識には、淺いのも深いのもあるが、その深く進んだものを科學的知識といふ。深い、正しい知識を得るには、思考したり、調査したり、また、種々の器械をつかつて、觀察したり、實驗したりする。さうして、その上これを幾度もくりかへしてたしかめ、すでに知つたことを材料として、考へをおし進め、種々のことがらの間の關係を明らかにして、一定の法則を知るのである。いひかへれば、ものごとの原因と結果との關係や、その間に行はれる法則を知つて、ととのつた知識とし、また、さらに進んだ研究をする土臺にするのである。たとへば、花のをしべとめしべとの關係についていふと、をしべの花粉がめしべにつかぬやうな工夫と、いま一つ、よくつくやうな工夫とをして、その實驗を重ね、花粉がめしべにつく時はみのるけれども、つかぬときはみのらぬことを知るやうなものである。世の中の進むと進まぬとは、科學の進歩するとせぬとによる。

知識が開けず、科學の進まぬところには、迷信が行はれる。昔は、星を仰いで、世の中が亂れるといつたり、傳染病がはやると、はうき星が出たからだといつたり、あるひは、きつねが

つくとか、烏の鳴き聲が惡いから、不幸があるなどといつた。今日でも、まださうした考へが殘つてゐる。たとへば、移轉をするのに、方角がよいとか、惡いとかいひ、姓名の字劃を數へて、運がよいとか、惡いとか判斷し、生まれた年によつて、その人の性質や運命やを、定めたりする。しかし、よいといつた方角へ移つて、困つた人もあれば、惡いといつた方角へ越して、都合のよくなつた人もある。同じ姓名の人も世の中には多いが、ある人は、偉くなつて世の人に敬はれ、ある人は、おちぶれたり、罪を犯したりしてゐる。漢字で姓名を書かぬ國の人々などには、この考へのまつたくあてはまらぬことは、いふまでもない。日本には、毎年百何十萬人の人が生まれるが、それらの人が、みな同じ性質をもち、同じ運命をたどるなどとは、考へられない。

かやうに、道理にかなはぬことを信ずるのを、迷信といふ。一つのことと、他のこととの間に、少しのつながりもなく、原因と結果との關係もないのに、一つのことは、他のことの原因であると信ずるのである。原因・結果の關係は、簡單なものは、普通の知識によつて知られ、むづかしいものは、科學的研究によつて調べられる。もとより、世の中には、科學的研究によつてもまだ知られてゐないことはたくさんあるが、それは、學者がいろ〳〵に考へて、原因と結果との關係を調べてきめてゐる。善惡や、正邪や、良否は、みな知識をもととして考へられねばならない。さうして、人は、道理によつて動かねばならない。知識によらず、道理によらず、いたづらに理由のないことを信ずる迷信は、今日、

世の中にどれほど害を及ぼしてゐるかしれない。知識をひろめ、學問を研究して、迷信をまつたくとり去つてしまふやうになれば、わが國は、今日よりどれほど進むことであらう。

二　感　知

アンテナ

病理學をやつてゐるぼくの兄が、ある日のこと、庭のしばふの上を一匹の綠色のいも虫がはつてゐるのに、ふと眼をとめた。

なんの氣なしにその歩行を見てゐると、いも虫は、ずん〳〵一直線にはつて行く。草があれば草を乘り越え、石があれば石を乘り越え、ずゐぶん大きな障害物にでくはしても、決してう回しない。そのひたすらな、ま一文字のばく進のしかたが、なんとなく兄の注意をひいた。いも虫の來た道を後方に四五メートルたどつてみると、そこに一本の紅葉があり、また、その行手を七八メートル延長してみれば、そこに一本の青桐があつた。かれはその紅葉からやつて來て、その青桐へ行く目的なのであらう。兄は、見當をつけて、なほ根氣よく見まもつてゐた。

たゆみない、のろくさい歩みの末に、いも虫は、果して、その青桐の根もとに到達した。さうして根もとにぶつかつたかれは、どうするかと見ると、少しのちうちよもなく、そのまま幹を傳つて登りはじめた。兄の興味は、ま〳〵しげきされた。さうして、約二時間ほどたつて、日もそろ〳〵暮れかかつた頃、いも虫は、一本の太い枝のつけ根のところで、始めて少し進路を曲げ、斜めに逆さになつて、その枝をまた傳ひ始めた。枝は、ぐつと横へ突き出た目立つ下

枝であつた。さうして、つひに、その枝先へ來た時、かれは、後脚で枝につかまつたまゝ、あふむけにぶらんと半身を空中にたれさげた。そこでいも虫は靜止した。

さらに一時間ばかりの後、夢のやうに青白い、一匹の美しい大きな蛾が、そのいも虫の體から生まれた。

いも虫が羽化することには、別に科學的な不審はない。だが、不審なのは、かれがその羽化のため、いかにもその目的をはつきりもつてゐるかのやうに、その枝へ、ま一文字にわき目もふらずばく進して來たといふことである。かれが、その枝を選んだといふことは、いかにも、偶然ではなささうにみえた。かれはどんな場所でも、行き當りばつたりに、產氣づくと共にこゝさがつて變形するのではなく、ちやんと、その目的に都合のよい特別にかつかうな枝を、遠くから感覺して見わけ、そこへいちもくさんに、まい進するが如く見えた。しかし、このやうなことは、いつたい可能であらうか。

翌日、兄は、大學の理科の教授に會つた。さうして、昨日實見したことを話し、いも虫の感覺についてたゞしてみた。

それは可能であらうと、教授は答へた。いも虫が無自覺にではあつても、それくらゐの官能をもつことは事實である。虫の腦ずゐには、一種のアンテナがあり、そのアンテナによつて、自分の危險や、えさを感知することは、はちの例に徵するまでもなく、周知のことである。おそらくこのいも虫も、そのアンテナによつて、羽化に都合のよい場所を、遠くからかぎつけたものであらう。

石

朝、眼をさますかさまさないうちに、ズシーン、ズシーンと、地震のやうな地響きがする。ちかごろ、家の前を、とてつもなく大きな石を運んで行くのを見るにつけて、思ひ出すのは、子供の頃の父の庭いぢりである。

父はもとより金持ちではなかつたが、長男の兄が開業醫として成功しかけてゐた頃であつたゐた。それに六十を越した父は、病身で官職の方もほとんど退いてゐたので、性來好きな庭いぢりなどをして、ひまをつぶしてゐた。なにも父のじまんをするつもりではないが、今考へると、父はその餘技において、書よりも、詩よりも、造庭がもつとも巧者であつた。もちろん、さうふんだんに金をかけるといふことはできもせず、欲しもしなかつたが、もんきり型に石燈籠に築山といつた風の、料理屋式の俗な庭や、いはゆる茶人好みのこせ〳〵と月並な技巧をこらした前栽といふやうなものよりは、もう少しふうわりと、自然の滋味をあぢはひ得るやうに風趣を宿らせることが、へんにうまかつた。そのくせ、ずゐぶん意しやうはこらすので、たとへば、流れのくねらせ方などにも、縱に見て奥

深い感じをこもらせるために、やりかけては何べん模樣がへをするかわからない。考へてみれば、よく〳〵ひまな人でなければ、できない道樂である。こんなにむやみに石を買ひ込んで、これをどう片づけるのかと思つてゐると、なるほどと思はれるやうに、だん〳〵適當の位置に、どうにかうまくはめ込んで、落ちつかせてしまふ。ぼくは、學校から歸つて、少しづつ形の整つてゆく庭の姿や、石の始末を見るのが樂しみであつた。

おもふに、最初、箱根の山などで、かつかうの石を物色して歩いた時から、父の頭には大體の構想ができてゐたのであらう。

白つぽい綠の苔がべつたりついた、紫がかつた大きな石を、三分の二ほどもよく土に埋めてしまふ。どうかすると、それ以上に埋めてしまつて、ほんの頭の一角だけを、ちらとのぞかせることがある。もつたいないことをするものだと、よく思つた。もちろん、すべての石をかならずそんな風に埋め込むといふわけでもないが、今思ふと、これも、いはゞ一つの藝術上の割愛法で、また、東洋精神の現はれとしておもしろい。

何でも、型にとらはれるといふことは、達人のすることではない。庭石といへば、かならず三分の二か四分の三は埋め込んでかくさなければならないものと考へるのは、決して上手な庭師ではない。どろんとたゞころがしてみた、無造作のおもしろさといふものもある。全體の形のおもしろさを愛でるために、わざとまるごと野ざらしにおくのである。見あげるやうな大きな岩が、山のいたゞきからころがつて來て、原

のまん中の松の大木の下などでふみ止まつた、といつたものには、人工の及ばぬ壯快な趣きがあるものである。だが、さういふ岩が、どうかしたかげんで、またすつぽり埋まつてしまふ。あるひは、風雨のしわざか何かで、ちらと巨體の一片だけをのぞかせる、といふやうな場合も少くはない。さういふのを、根の淺いのと見比べてみると、どうもたしかに感じがちがふ。根の淺いものは、いくらこけをどしの見かけをしてゐても、やつぱり、深いやうには見えないから不思議である。たけのこは、土の割れ目から、あかみがかつたうす綠のせん端のひげのやうなものが、ほんの少しばかり見えても、そのひげのはゞや、土の盛りあがりで、およその太さを推量し得られるが、石は生き物ではないから、根の深さを察しやうはないはずである。だから

それは、ぜん〳〵人の感じ以外に、何の根據もないわけである。それでゐて、よく熟視すると、そこについてゐる苔の古さや何かで、なんとなく、まつたくなんとなく、根の淺いのと深いのとでは、見ごたへがちがふことは事實で、大きな岩がわづかに頭をのぞかせてゐる感じは、あたかも、雲の海に埋もれた高山のいたゞきの如く、まさに、片鱗といふ言葉を思はせる。

たしかに、深く埋められた石がそれだけ含蓄の趣きをもつことを發見したればこそ、昔の偉い茶人たちは、それを造庭の上に取り入れたものであらう。知らない人が見たら、なぜそんなに埋めてしまふのか、せつかくこんな美事な石を、たくさんの人手間をかけてわざ〳〵遠くから運んで來て、しかも、そのりつぱさを大部分土中にかくしてしまふとは、わけのわからぬ惜

しい話ではないかと思ふことであらう。だれでも、惜しいことは惜しいのである。咲きそろつた朝顔の花を、片はしからきり捨ててしまつて、たゞ一輪だけを活かすといふ、效果的なかん賞法は、説明されればまだしも、理解ができるかと思はれるが、一つの石は、一つの全體であつて、同じものの集團ではないから、いつそう合點がゆきかねるであらう。だが、名人にいはせれば、石にしても利久の朝顔と同じわけで、つまり、惜しいほど美事なものであるがゆゑに、そのたしなみ方は、なほいつそう餘ゐんの盡きぬ幽玄なものとしたくなるのである。また、それゆゑに、表面的なてき面の效果をぎせいにした方がよいのである。一時に全體を見せてしまへば、石は、それだけのものにとゞまり、限られてしまふが、かくされたものは、餘分を想像に任せてあるだけ、無限を暗示する理くつになるからである。

もちろん、西洋でもさすがにえらい藝術家と稱される人は、この間の祕訣を十分に心得てゐた。彫刻家が全身像を造りたいところを、わざわざトルソー（人體の胴で手・脚のないもの）といふやうなものを造つてゐたりするなどは、このよき證例であらう。

いふまでもなく、庭石のかん賞などは、いかにものんきな、ブルジョア（金持階級）の茶呑み話と思はれるであらうが、しかし、もと〳〵審美といふものには、審美それ自身の立場があるのだからしかたがない。その立場をどうかうといふのなら、初めから藝術など否定してしまふ方がよいのである。

三　りすを育てる

山の草刈人が、見つけておいたりすの子が、巣ごと私のもとへ屆けられたのは、七月の初旬であつた。杉の皮とはいふものの、こまかにほぐしたものを、あむやうにしてまるめてあるので、手ざはりも、色合ひも、むしろ、しゆろの毛で造つたやうなその巣の中には、三匹の子りすがゐた。生後一ケ月と推定されるこの子りすたちは、まだ齒が目立たず、體に比較して頭が大きかつた。尾はまだ細かつたが、それでも、むじやきそのもののやうなお尻の上に、いかにも大人らしくその細い尾をぴんと立ててゐた。

しかし、何といふ愛らしい目つきや、足つきであらう。うすい茶褐色にくまどられたまぶたに守られる眼は、まるで黑曜石のやうに輝いて、あらゆる哺乳動物の乳兒に特有な、涼しい張りをみせてゐるし、鎖骨のある前脚は、各〻のゆびが離れてゐて、まるでかへでのやうにあどけない。毛の生えてゐる小さな耳、柔らかなスロープをつくる前額、いてふの實の兩端のやうな形に切れあがつた目尻——今のうちは、まだすばしこい動作を示さず、胃のふさへみちてゐれば、三匹がころ〳〵とかたまりあつて、眠りほけてゐるのである。

しかし、りすを乳兒から育てた經驗のなかつた私たち家族の間では、どうして育てるかが最初の問題であつた。哺乳動物だから、乳を飲ませればいゝことはわかつてゐる。が、どうして飲ませたらいゝのか。私たちはあれこれと考へた末、試みに脫脂綿に牛乳をひたした。

さうして、一匹々々りすを巣からつまみ出し

て、その鼻先へ、一方の手の指先で牛乳綿をあてがつてみた。乳兒たちは、前脚でその綿をひしと抱へ込み、長い後脚を手首にからんで、うつ向けた私のてのひらへ、あふむけにぶらさがつた。さうして、母の乳房をしぼるやうに、かはいゝ前脚の指先で、牛乳綿をおしては乳をしぼりながら、うまさうにちゆつ〳〵と吸ふではないか。そこで、子りすたちがせつせと綿をおすときには、かれらを失望させないやうに、私は三本の指先で強く綿をおして、とく〳〵と牛乳を口に流し込んでやる。それで、母の乳房からおいしい乳をしぼつたつもりで滿足してゐるのだ。

だが、さうなると、脫脂綿の方も、乳房の形に突起のあつた方がいゝので、三匹が一度に飲むことができるやうに、三つ以上の突起をこしらへてやる。その方がくはへるのにも便利だし、綿の中へ鼻をおし入れて窒息したり、乳を鼻から吸ひあげたりすることも少いわけである。

たゞこれだけのことだが、初めのうちは不器用で、指先から手首へ傳はつてぽた〳〵落ちる乳のしづくで、子りすの腹をぬらしたり、牛乳綿を強くしぼり過ぎたために、子りすをむせさせたりする。が、なれるに從つて、今までおや指と、人差指と、中指だけでつまんでゐた牛乳綿を、やがては、五本の指でつかむやうになり、その五本をうまくあしらつて、三つの乳房、すなはち綿の突起から同時に乳をしぼりながら、三匹の子りすに一度に哺乳することもできるやうになつた。それから、牛乳には砂糖も入れて、味の調節もしてやる。もちろん、七月の上旬・中旬といへば、牛乳の腐敗も早いから、牛乳屋

に頼んで、毎日早朝と、午後とに、五勺づつ配達してもらふ。さうして、腹いつぱい飲ませて巣へもどせば、子りすたちは、柔軟自在な體をもんどりでも打つやうにくる〳〵廻したり、あふむけにしたりしながら、文字通りまるまりあつて眠つてしまふ。が、みなさんは想像することができるだらうか——三匹の小さな乳獸が、一度に私の手にぶらさがつて、ちゆつ〳〵と小さな音を立てながら、砂糖入り牛乳をむさぼり飲む愛らしさを。また、一息つくごとに、その無心な黑眼が、私の顏か、てのひらか、それともどこといふ意味もないやうな一點を、珍しさうに、まじめに見つめるのを。——私が乳を與へてゐる間、家族はほとんどつききりで子りすを見てゐる。さうして「まあかはいゝ。」と感にたへぬやうにいつたりしてゐるが、そのうちにがまんができなくなつて、ついと私の手から子りすを奪ひ取る。

「よせよ。乳を飲んでゐる最中に。」

と、私が叱るのを尻目にかけて、今度はほかの者が一生けんめいに乳を與へる。

「ねえ、たゞ、りす、りすぢやつまらないでせう。」

といふ。

「つまらないとは。」

「だつて三匹もゐるのですもの。めい〳〵に名まへがなけりや……。」

「さうだな、なんかいゝ名まへはないかな。」

「タマぢやどう。タマに、コロに……。」

「いやだね。そんな猫みたいな名は。」

「ぢや、リチコはどう。ふだんみんなで『リチ公、リチ公』と呼んでゐるぢやないの。リチ

公よりはリチコの方がかはいゝでせう。」
「うむ。それでもいゝ。……さうしよう。」
「それから、あとの二匹は。」
「めんだうだから、みんなリチコでいゝ。」
みなさんは、たわいもない家庭風景などを聞かされてゐるやうで、少々迷わくだらう。が、およそ子りすたちに關するかぎり、ほとんど一切がたわいないことだ。たわいのある、能率のあがる研究などをしてゐたのでは、子りすたちは、人間となんらの交せうももちはしまい。研究研究とあまり肩を張らずに、たわいなくかまつてゐるうちにも、おのづから習性の觀察などはできてゆくのだ。ともかくも、この三匹は、共通のリチコといふ名で、私たち家族に育てられてゆく。體長約十センチ、尾長約九センチ、暗黄褐色の尾は、子供たちが俗に「猫じやらし」といつてゐる禾本科植物の穗を、そのまま長くしたやうな線狀を呈してゐて、毛の先端は白い色にぼかされてゐる。

さて、かうして牛乳で育てられてゆくうちにも、早いもので、同じ七月の二十日頃には、だんだんに齒も目立つてくるし、りす特有のてうやくもできるやうになる。さうして、尾をぴんといかめしく立て、長い後脚で床の敷物をけりながら、ぴよこんと兎のやうに、しかしあざやかなすばやさで室をかけ廻り、あるひは、三匹が、互ひに尾を追つかけあつて、じやれ廻つたりしてゐる。

ちよつとここで、齒のことをいはせてもらふが、いつたいりすの門齒は、くるみのやうな堅果や、樹皮などをたべる必要から、上下兩あごの各一對とも、ずこぶる鋭くまがつてをり、さ

うしてその門齒に、のみのやうな強い働きをさせるために、それがあご骨にはまる部分は、露出部よりも長くなつてゐる。

また、前面ののみに、はふらう質があるので、物をかじるにつれて他の部分は磨滅し、したがつて、はふらう質をかぶつたのみは、益々鋭さを加へてゆくが、しかも、これは、内側から絶えず、新しく生ずるために、のみはいつでも鋼鐵のやうだ。

それから、りすには犬齒といふものがなく、前面の門齒から間をへだてて、一足飛びに、食物をこなす臼齒になつてゐる。いふまでもなく、これもまた、門齒が球果をうがつときに、他の齒がこれに接してゐてはじやまだからで、えうするに、いつさいが物をかむのに都合がいゝやうにできてゐるのだ。——かういふ特徴はすべて、私のもとへ送られてから二週間目にけん著になつてきた。

齒と共にいちじるしく發達してゆくのは、樹上生活に便利な諸點だ。屈伸自在な體、てうやくに適する強くて長い後脚、樹枝を握るのに都合がよいやうにわかれた指、樹幹をよぢるのに必要な鋭い爪——りすはこれらの構造のおかげで、いたちや、きつねなどに追はれても、樹幹を螺旋狀にのぼつて害敵をめんくらはせ、また、たか類や、ふくろふに追はれた時は尾を頭の上までくるりとなびかせて、そのへん平な屋根の下に體をかくす。もつとも今のところでは、尾のさうした特徴はまだあらはれず、あひ變らず猫じやらしといふか、あるひは、德利を掃除する刷毛とでもいふかのやうな形でしかない。てうやくの方も、まだ五六十センチだ。さうして、

ピイッといふ鳴き聲をあげながら、大きな頭を振り立てて、ぴよこん〳〵と歩いてゐるが、この大きな頭も、後に胴の部分がそれに應ずる程度に發達することを示してゐるものだ。

が、何といふ品のよい色合ひであらう。さびた赤色を帶びた四本の脚、豊かな栗色の體側、それが、腹部へ移るに從つて次第に淡くなり、腹部で純白になる階調。背面のしぶい灰褐色。そうじて純日本的な、はででないうちにりんとした氣品を漂はす色彩は、はなやかな萬華鏡にそろ〳〵飽きのきた私を充分魅するにたる。

さて、このくらゐに育つてくると、私たちは、いち〳〵綿に乳をふくませる面倒をしなくても、なんとか簡單な哺乳法があるまいかと考へるやうになる。また、猫を飼つてゐる私の家では、監督なしに室に放しておくわけにもゆかないので、私たちが忙しくてかまつてゐられない時でも、りす同志が勝手に遊びたはむれてゐられるやうなゆつたりしたかごを、あてがはうといふ考へにもなる。ちやうどさいはひ、じやかごの不用なのが一つある。

これは、約六十センチ立方の金あみで、底は亞鉛板だから、このかごなら、りすの鋭い齒にかみこはされることはない。さうして中には、まだうひうひしい葉のついたくぬぎの梢を立て、底にはわらを敷きつめてやる。もつとも夜の寢床だけは、ふるさとのりすの巣をそのまゝにして、わらの中へ埋めておく。りすのかごによく車を入れてやる人があるが、もし車がなければ、どういふ運動をするかと思つて、わざと車を入れずにおく。ところがいゝあんばいに、かれらは、キュツキュツ、クックッといふ甘たれ

た聲をあげ、廣い室内よりはかへつておにごつこに都合のいゝこの金あみの中で、縱横に枝や、あみの目を傳ひながら追つかけつこをするのだ。一匹が、他の者の尾にとびつく。と、相手は、わらの上でくるりと一つあざやかなもんどりをうつて、逃げながら枝に移る。追ふ方もいそいで枝に行く。と、今度は、相手は、後脚で枝からたらりとつりさがつて、そのまゝすとんとわらの上に落ちる。かと思ふと、樹皮をかじり、葉を食べ、四角な金あみを一直線に下から上へ、天井から下へとひとめぐりする。このひとめぐりがなか〳〵面白いと思つたらしく、偶然に覺えたこの運動を、まづ、體格の一番いゝのがなんべんでもくりかへし、つひには、ひんぱんにこれを續けて、車の代りにしてゐる。

哺乳の道具の方も、綿からスポイトに代つた。乳を吸ひ込ませたスポイトの口を、金あみの目にあてがふ。するとりすたちは、いそいでそこへ集まつて來て、スポイトの口から牛乳をすゝる。どうせわれ勝ちなのだから、一番發育のいゝのが、いつでも先に腹いつぱい飲むことになる。人間の場合は、分別のある行動の方が美しくみえるが、獸、それも幼い獸は、かへつてこの方が愛らしくみえる。それにしても、交互に落着いて飲めるやうにしたいと心配したが、そこはよくしたもので、二番目に大きいのが、おもしろい防ぎよ法を發見した。それは、丈夫な門齒をしつかり金あみの目にからむことだ。かうしてゐれば、せつかく飲んでゐる最中に、一番強いのに頭で思ひきりこづかれても、自分の口は元の位置を離れずにすむ。さうして、體中の力を門齒に集めて、ぐん〳〵と乳をむさ

ぼり飲む。やがて一番小さいのも、この方法を習得してぐわんばり出した。が、これでもまだ、お互ひに樂々と牛乳の分けまへにはありつけないだらう。その上、こんな競爭をしたのでは、スポイトの先をかみくだいて、ガラスをたべる危險も充分にある。そこで、やはり順々にてのひらへのせて哺乳する方がいゝといふことになつたが、うつかりすると、見わけそこなつて、同じ子りすに二度續けて哺乳しないともかぎらないので、家の者の發案で、とり〳〵に色の違ふ人絹の首輪をしてやることになつた。一番大きいのと、次のとは、大きさの區別がよくつくので、同じ色の赤い首輪、三番目のが黃色い首輪だ。これはなか〳〵うまい思ひつきで、順々に養つてやることができる上に、首輪をしてゐるすがたが、小さな動物をいつそうかはいくする。

七月が八月となつた。むし暑い日が續くので、清涼な山地にすむはずのかれらにとつて、人間の家の生活が適應したものでないことが、憂慮されてくる。體が一番大きくて強いのだけは、元氣にあみの中で曲藝のやうなことをしたり、わざと日の當るところで、長々と四つんばひに寢ころんで日光浴をしたりしてゐるが、あとの二匹は、目立つて食よくが減退し、動作が不活潑になつてくる。山の人のうはさによると、私のりすたちとほとんど同時に、山で見つけて他の家へ送つた數巢の子りすたちは、炎暑のためかどうかは不明だが、ともかく、全滅したといふ。そんなことを聞くにつけても、不注意にはしておけない。そこで私たちは、晝は、庭の樹の下陰にかごをおき、夜は、一番涼しい室や、

また時には、猫の夜間の通路にと穴をあけておいた、湯殿のドアのそばの風通しのいゝ場所にかごを移す。が、いろ〳〵の注意もむなしく、八月八日のむし暑い夜、一番ちびが、すつかり參つてしまひ、夜明け方になつて、介抱のかひもなく、私のてのひらの上で、もろくも死んでしまつた時には、少し感傷的かもしれないが、私たち家族の悲しみは少くなかつた。

人は、ばか〳〵しいと笑ふだらう。が、私たち家族には、「死んだよ。」ですましてゐられぬ氣持があつた。かりに、私のてのひらの上で横たはつてゐるかれんな獸が、體は、えびのやうに曲つて硬くなつてゐても、目だけは、命のあつた日と同じく、涼しく張られてゐるかつかうを、想つてみたまへ。たとひ、たわいない事柄ばかりであらうと、ともあれ、愛情と名のつく感情を傾けて暮した私とすれば、これが、もう生命を土にかへしたむくろ——たましひの飛び去つた一かけらの物質だとは、思ひたくない。そこで私たちは、まづ、この子りすの首輪を、他の同腹の兄弟たちと同じ赤い人絹に取りかへてやつた。さうして、庭の一隅に穴を掘つてわらを敷き、死がいをその上に横たへてから、いつも好物だつた日本くるみを、命の思ひ出に、むくろのそばに添へてやつた。それから、土をかぶせてしまふと、「リチ公の墓、わら床にくるみを添へて、昭和八年八月九日」と書いた棒杭を、土まんぢゆうの上に立てた。あとから考へるとをかしいが、數株のききやうが開花してゐる、涼しいはぎの下陰を墓地としたのも せめて、死がいが早く腐敗しないやうにとの心やりからであつた。さうして私は、今でも思ふのである、

「あのリスの死がいを、猫のごちそうになんぞしなくてよかつた。」と。

さひはひにぎせいはこれだけですんだ。ところが、このちびの死と共に、もう一匹のちびの方がめつきり丈夫になり、翌日からはにはかに食よくもわう盛になつた。さうして、まだ乳離れこそしないが、たうもろこしや、日本くるみのほかに、にんじんや、いもや、南京豆や、樹葉などもたべるやうになつた。

やがて、季節がめぐつて九月の中旬以後になれば、わざ〳〵割つてやらなくても、自分で固いくるみに穴をあけるやうになるだらう。ついで、何よりも好物の栗の季節になるし、柿もまた、なか〳〵の好物に違ひあるまい。

子りすたちは、一日々々と私たちになれ親しんでゆく。さうして、ちよつと腹でもなでてやると、子猫か犬ころのやうに、くるりとあふむけになつてみせ、てのひらにのせて體をかいてやれば、心地よげにうづくまる。また、かごのそばを通れば、あみ目をわたり歩きながら、人の行く方角へ廻つて行くし、懐に入れれば、着物の襟をかんだり、襟にはさんであるくろもじをかじつたりして、餘念もなく遊ぶ。たとひ、人の指先をかむことがあつても、もちろん、ふざけてゐるのだから強くはかまない。あたかも、犬が飼主の手をくはへて、たはむれるやうなものである。人間がかまつてやらないと、兄弟同志で上になり下になりしてすまふを取つてゐる。それにも飽きれば、後脚の爪で枝からさかさにつりさがつて、機械體操のやうに前後に大振りをやつてゐる。いよ〳〵これで子りすたちも、家族の一員らしくなつてきたわけである。

九月中旬にはいると、はたしてかれらは、日本くるみを自分で割るやうになつた。恐るべき齒ののみではないか。くるみは、人間ならば火であぶつて合はせ目からはうちやうを入れ、針のやうなもので掘り出したりしてたべるのであるが、りすは、つぎ目のない胴つ腹に穴をうがつて、喰ひ破つてゆくのだ。よく知つてゐるもので、かうすれば、人間がナイフで掘り出すやうなところでも、いきなり齒があたつていつて、かすをあまさず、果肉を全部たべることができるのである。こんな齒だから、部屋で遊んでゐるところへ、猫がはいつて行つたのを氣づかつたりして、あわててつかまへてやらうとでもしたら、人間のあわたゞしさにびつくりして、たまたま人間にかみつく痛さといつたらない。皮膚などはひとかみで破つて、鋭い齒端で肉ふかく刺す。

いろ〳〵のごちそうのうちでも、とくに栗はおいしいごちそうだ。この時分は、もう山から持ち越しの巣はぼろ〳〵にちぎれてしまひ、かれらはわら床の下側に、べつに自分らで、こまかくわらをちぎつて寢室をつくつてゐたが、この中で、たとひあふむけにひつくり返つて眠つてゐようとも、栗さへ突き出せば、さつさうとして飛び出して來る。さうして、長い尾と後脚とを、三脚のやうな支柱にしながら、體重を尾に托して坐り、一對の前脚で栗を抱きながら、せつせと口で皮をむき始める。その上手なこと、かれらは、手のやうな働きをする前脚の先で、絶えず栗をひつくり返しながら、順次に皮をむしり取つてはあたりに飛ばし、ついで、齒で澁皮を巧みにむいて、さながら、人間がナイフで

むいたやうにしてからたべる。「栗鼠」とはうまい字をあてたものだと、つく〳〵思ふ。それにしても、親からも誰からも教はつたことのない、かういふ技術のよつてきたるところは、やはり、本能の祕密に歸すべきであらう。それに、坐つた姿勢の愛らしさが、またかくべつである。

ところが、九月下旬のある朝、大きな方の子りすが、はからずも、戸外に遊びに行つたきりになつてしまつた。初めは、後庭の雜木林のえごのきの梢、つぎには栗の木の梢、三度目には道を横ぎつて、向かふ隣りのすゞかけの梢へと遊び歩いてゐるのを、つぎ〳〵と追ひかけたが、なにしろ、敏捷過ぎてつかまへることが出來ず、大好物の栗さへ見せれば、梢からてのひらへとおりて來ながら、ついと、すりぬけて地面に飛びおりてしまふ。さうして、木の下や垣根をくぐつて、またたくまに姿をかくす。私たちは、家中總出で、まる一日追ひ廻したにもかゝはらず、とう〳〵、その日はそれなりだつた。ところが、そのつぎの日には、附近の住宅地を遊び歩いてゐたといふ報告を聞いた。お宅のりすらしいのが、私のうちの庭の樹にゐましたといふやうな報告が、近隣から來る。首筋が赤いのは、風變りなりすですねともいふ。例の赤い人絹の首輪がはげて、首筋を染めてゐたのだ。五日目にはうまい工合に、庭内の砂利道づたひに、玄關の前まで歸つて來たが、女中が「あつ、リチ公が歸つて來ました。」と叫びながら、嬉しまぎれに玄關のドアから飛び出たいきほひに、かれは大いにめんくらつて、また〳〵住宅地の方か、林の方かへはねて行つてしまつた。何しろ、そこら一面に栗の實はみのつてゐるし、ちよつと

遠出をすれば、畑には白菜もある。林中の秋のきのこ、ふんだんな樹皮や樹葉、といふやうに、食料の豊かな、まるで食堂そのもののやうな場所なのだから、容易に歸つて來ようとも思へない。こんなことで、九月の下旬には、三匹の子が、たつた一匹になつてしまつたが、そのかはり、最後の一匹と思つてよけい大切にするせいか、加速度にいよ〳〵私たちに馴れ、三匹分ぐらゐ茶目もしたり、慕つたりするやうになつた。

九月下旬から十月初旬へかけて、私は、十日間ばかりの信州の山旅をしたが、その旅行中、乘鞍嶽(のりくらだけ)でも、美ケ原方面ででも、八ケ嶽の行者小屋附近ででも、よくりすを見かけた。

附近の炭燒小屋の男の話では、地上六メートル以上の梢などで、樹の實を摘んで落してから、自分の方が一足先に地上へ飛びおりて、自分よりあとから落下して來るその實を受け取るといふ。

「あの枝から、向かふの樹のあの枝まで、一跳びに跳びまさあ。」

といふ、距離を見ると、六メートルもの間隔である。いまさらに驚くべきてうやく力である。

旅から歸つてみると、子りすだと思つてゐたリチコは、意外にも、すつかり大人らしくなつてゐる。旅行前には、猫じやらしのやうだつた尾が、見るもあざやかな扁平に變つてゐて、まるでこてのやうだ。幅五センチ、長さは體長の二十センチよりもやゝ短かくて十七センチ——十日見ぬ間にがらりと樣子が變つてゐるが、この尾を波狀に背と頭の上へ波打たせてゐると、體は、まつたくその下にかくされてしまふ。前にもちよつといつたとほり、これなら、山野に

出てたかや、はやぶさや、ふくろふに襲はれた時のカムフラージの屋根になるであらう。また、つめたいトタンの上などに眠らなければならぬ時は、尾をしとねにして、その上に、體をまるめてゐる。また、空中てうやくの時は、バランスをとつて墜落を輕くする道具にもなる。尾の用途は、よく觀察してみるとなか〳〵多い。

が、大人らしくなつても、その愛らしさには、なんの變りもない。つかんで眠らせようとすると、リチコは、二つ合はせて空洞にしたてのひらの中でも、くるりとひと廻りでんぐり返しをやる。さうして、頭を下にして眠らうとするが、その廻轉の最中に、あふむけのまゝ後脚で首をかいたりする。また、膝の上で栗を與へると、前脚で栗をくる〳〵廻したり、皮をあたりにはふり出したりするしぐさは、あひ變らずだが、をかしいことには、後脚と尾とで坐つてゐるつもりの姿勢が崩れて、やがて完全にあぐらをかいたやうなかつかうになる。それらの身ぶりの、何一つとして愛らしくないものはない。室に出してやれば、椅子の脚でも、植木の鉢でも、鉢植ゑの植物の葉でも、敷物でも、やたらめつぽふにかんで歩き、ふところの中で栗をやれば、懐中を栗の皮の山にしたあげく、腹がふくれれば、その皮の上で、半日も眠りこけてゐる。そのまゝ友人の家へ遊びに行かうが、散歩をしようが、おかまひなしだ。また、時には懐中であふむけにのけぞつて眠つてゐるお腹を、指先で突いても知らん顔をしてゐるので、ひよつとすると、窒息でもさせたのではないかと心配して、烈しくゆすぶつてみると、うつとりと、眠さうな眼をあけたりする。猫の場合でも、膝の上な

どであふむけに眠るのは、人間をすつかり信頼して安心してゐる證據ださうだが、りすでも、また同じことだ。動物からこんなに信頼されたら、どんな人にしても嬉しいだらう。

わら床で眠つてゐるかつかうも、かはいゝものだ。あふむけ、横寝、伸びた寝ざま、まるくなつた寝姿、耳をたゝんで首だけわらに突つ込んだ様子、空洞にしたわらの中から、立派な尾だけを出してゐる様子……。そのりすをかまひたくなつて、わらの上から頭をたゝくと、クックック、グルグル、グイイ、グリルグルといふやうな聲を、たゝくたびに出す。嬉しい時にも、怒つた時にも、かういふ聲だが、なんのことはない、指でおすと鳴り出すゴム人形のやうである。眠つてゐるところをたゝかれる時は、いふまでもなく、「なんだ、せつかく眠つてゐるのに、よせよ、うるさいな。」といふこゞとなのだ。

後庭の林のなら、くぬぎ、栗、ぬるで、はぜなどの葉が、すつかり色づいた昨今では、私は、いつもストーブのある部屋へりすのかごをおいてゐるが、後脚で坐り込んで腹の上へ前脚を行儀よくおき、きよとんとした顔つきをして、あたりを眺め廻してゐる、たぬきの腹づつみのやうなかつかうや、歩いてゐる最中に、ふと片方の前脚を上へ高くさしあげて、體をひねりながら、同じ側の後脚で小刻みに腹をかいてゐるかつかうなどは、人間の大人にも、子供にも見せたい、ユーモラスなものだ。また、窓のカーテンは、自分だけで遊ぶ時の一番樂しい遊び場だが、すばやくレールの金具まで駈け登つたり、敷物の上にあふむけになつてカーテンの房にじやれたりする。かういふ時、もしカーテンの近

くにテーブルがあつて、その上によしごゐが遊んでゐたり、また、あたりにおほこのはづくのかごでもあれば、よしごゐは長い首をのばして、不安さうに、けゞんさうに、下からゆれてくるカーテンを眺め、一方、おほこのはづくは、おれの食料のくせに、平氣で眼前を上下したりしでゐるのはよろしくないぞ、といふやうな顏つきをしてゐる。まだ生まれてからこはいものがない無心なリチコは、たとひ、猫が近づかうと、まるでむとんぢやくで、ひとり悅に入つてゐるのだ。あるひは、さつきもいつたやうに、私のふところに飛び込んで來ると、一廻りでんぐり返しを打つてから、上向きの姿勢でうと〳〵と眠る。ふところは、ほんたうに工合のよいところらしい。だから、かごの中へちよつとてのひらを出すと、そこから腕へ、腕からふところへと、まつしぐらに駈け込んで來るのが、一つの習慣にさへなつてゐるのである。

人は、よく私のことを、人間よりも動物をよけいに愛する男だといふ。子供が空腹でもさまで騷がないが、鳥獸が空腹だつたり、寒さにあつたりすると、大騷ぎをするといふ。しかし、考へて見たまへ。人間の子供は、ある程度までは、自分で自分を處理し得る環境におかれてゐる。が、山野にゐる場合と違つて、飼はれてゐる鳥獸は、人間にたよらぬかぎり、どう自分を處理しようもない。空腹でも、工合が惡くても、訴へるすべさへ知らず、たゞ、默つて苦痛を忍んでゐなければならない。みなさんは、疾病のある小鳥が、たゞふくらんでじつとしてゐる姿や、寄生虫に心臟を犯されたシェパードが、なんとなくいつもの元氣もなく、いううつに、鈍

重にしてゐる樣子などを、よく知つてゐられるであらうが、默つて忍んでゐる者には、それに比例して、それだけ多くの注意を加へ、その微細な動作や、ほとんどとらへがたい表情にまでも精通して、それ〴〵の要求に、適度に應じてやる必要があるのではないであらうか。

私の信ずるところでは、動物の生態研究が、われ〳〵の知識を豐富にするのと同じ程度に、動物を愛することは、つまり、われ〳〵が、秩序と道理を學んでゐることにほかならないのだ。

四　實物とその模型

（一）

われ〳〵が、言葉を用ひて物を考へる時には、まづ、一々の實物に名を附け　實物のかはりに名を用ひて考へるが、物に名を附けるに當つては、無意識ながら一種の細工を加へるために、實物それ自身と、その名によつていひ表はされるものとの間に、若干の差が生じてゐる。一種の細工とは、すなはち、實物を模型化することであるが、これが、一方においては、言葉の便利な點であり、また他方においては、言葉が人間を誤らせるもとでもある。實物に名を附けて、これを模型化する際に行はれる主な細工は、似たものを同じものとみなすことと、境界のないところに境界をつくることである。

私は、數年前に、「境界なき差別」と題して、およそ宇宙間の物には、差別はあるが境界はないと論じたことがある。これは、私が、言葉を離れてたゞちに實物に接してみると、ぜひともこの點に氣がつかねばならぬと、感じたことを述べたのであつた。今これをわかり易くするた

めに、まづ、差別はありながら境界のないことの、もつとも明瞭なものの例をあげてみると、虹の色などもその一つである。紫・紺・青・綠・黃・樺・赤と七色の差別は明らかであるが、その間に判然たる境はどこにもない。赤からは自然に樺に移り、樺からは自然に黃に移り、同じ色のところはどこにもなく、また、急に飛んで移るところも一ケ所もない。晝夜の差別もそのとほりで、晝は明かるく、夜は暗く、その差別は明らかであるが、夜が明けていつとはなしに朝となり、日が暮れていつとはなしに晩となつて、その間に、判然とした境界はどこにもない。四季の差別もこれと同じく、知らぬまに春は夏になり、知らぬまに夏は秋になる。暦を見れば、何月何日が立春で、何月何日が立夏であると書いてあるが、實際その日になつてみると、前日にくらべてなんの異なつたこともない。晴雨の如きも、明らかに晴れた日と、明らかに雨の降る日との差別は明瞭であるが、その間に種々の程度の曇つた日があつて、晴天に入れてよいか、雨天とみなしてよいか、判斷に苦しむやうなあいまいな天氣も、決してまれでない。寒暖といひ、長短といひ、黑白といひ、およそ、對をなした言葉は、その兩端を取れば差別は明瞭であるが、その間には、どこにも判然たる境界のないものばかりである。中華民國や日本の繪では、雲に明らかな境が畫いてあるが、實物に接してみると、極めて漠然たるもので、富士山などに登る時には、知らぬまに幾度も雲に入つたり、雲から出たりしてゐる。地圖を開いて見ると、海と陸地との境が明らかな線で示してあるが、實際海岸へ行つてみると、波が絕えず寄せたり

返したりして、どこまでが陸地の領分で、どこからが海の領分やら、正確に定めることはできない。このやうに、常々明らかに境界がある如く考へてゐたものも、實物に當つてみると、決して、境界はない。森や、やぶの周圍の境なども、地圖には書けるが、實際には存在しない。きれいにたち切つた紙の緣などを見ると、そこに明瞭な境界がある如く思はれるが、これは、肉眼で見るために生ずる誤りであつて、もしも、これを何百倍かの顯微鏡で見たならば、無數の纖維が不規則に亂れ交つて、あたかも竹やぶの如くに見えるであらうから、こゝにも決して、判然たる境界を定めることはできない。

以上は、空間における境界について述べたのであるが、時間における境界も、これと同樣で、常に境があると思つてゐることでも、實際を調べてみると、決して境は附けられない。例へば、誰は何月何日の何時何十分に生まれたとか、何時何十分に死んだとかいつて、生まれるのも、死ぬのも、時の一點にある如くにみなして、人間の生涯の始め終りに明瞭な境を附けておくが、實際には、生まれるには、生まれ始めてから生まれ終るまでに、相當に時間がかかり、死ぬにも、死に始めてから死に終るまでには、相當に時間がかゝる。その上、今が生まれ始める時であるとか、今が死に終つた時であるとかいふことも、決して判然とはいはれぬ。電燈のスイッチを一つひねれば、たちまち明かるくなり、またひねれば、たちまち暗くなつて、明かるかつた時と、暗くなつた時との間にも、判然たる境がある如く思はれるが、これも、電氣が來て細い糸が光を放つまでには、いくらかの時がか

かり、電流が絶えて光が消えるまでにも、いくらかの時がかゝる。たゞ、その時間がはなはだ短かいので、われ〳〵にはあたかも、なんの長さもない時の一點の如くに感ぜられるのである。かりに、特別急速度の活動寫眞で撮影し、これを極めてゆるやかに映したならば、あたかも、夜が明けて朝になり、日が暮れて夜になるのと同樣な變化があるだけで、決して、その間に境界はないであらう。

また、普通の言葉では、相對立するものの如くにみなし、かつ、その間に判然たる境があるかの如くに思つてゐるもので、實際には、決して對等でないものが、いくらもある。例へば、曲と直とか、動と靜とかいふ類がそれである。曲といふ中には、はなはだしく曲つたものから、わづかに曲つてゐるものまでの間に、無數の種類があるが、直といふのは、まつたく曲らぬものがたゞ一種あるのみである。その上、實際について調べてみると、絶對に曲つてゐないといふものは、ほとんど一つもなく、多くは、かすかに曲つてゐるものの曲りを大目に見て、直と名づけてゐるに過ぎない。動と靜ともこれと同樣で、動といふ中には、はげしい動きからかすかな動きまでに、無數の種類があるが、靜といふのは、まつたく動かぬといふ、たゞ一種があるのみである。その上、實際には、絶對に動かぬといふものは、ほとんど一つもなく、たゞ、動きやうのかすかなものを、かりに靜と名づけてゐるに過ぎない。有と無とか、異と同とかいふのも、理くつはまつたくこれと同じで、有には、多量にあるものから、極めて微量なものまで、無數の種類があるが、無には、まつたくな

いといふ一種類よりない。異にも、はなはだしく異なるものから、かすかに異なるものまでの間に、無數の程度があるが、同には、絶對に異ならぬといふ一つの場合よりない。かやうに考へて見ると、曲と直、または、動と靜といふ如き對語は、決して、同じ價値に反對の符號を附けたといふやうなわけのものではなく、直とは、わづかに、無數に列んでゐる曲の一方の極端に位する一點に過ぎず、また、靜とは、わづかに、無數に階段のある動の一方の極端に位する一點に過ぎない。言葉をかへていへば、曲のもつとも少ないのが直であり、動のもつともかすかなのが靜である。したがつて、直は曲の中の特殊の場合、靜は動の中の特殊の場合と考へるのが、至當と思はれる。更に、同じ考へ方で推せば、無は有の一種、同は異の一種と斷定することができるが、この考へを以て、實物に接してみると、實際はいつもそのとほりで、有と無との間にも、異と同との間にも、決して境はない。氣を附けてみると、世間の人々が同じにみなしてゐる物も、決して眞に同じではなく、こと〴〵く少しづつかならず違つてゐる。

私は、言葉から離れて、直接に實物に當つてみた結果として、次のとほりに考へる。世の中には、差別はあるが境界はない、また、同じ物が二つは決してないと。

（二）

ところが、前にも述べたとほり、言葉を用ひて物を考へるには、まづ、實物にそれ〴〵名を附けてかゝらねばならぬが、物に名を附ける際には、つい知らぬまに、腦で細工を施して、實物と、それに附けた名が表はす物との間に、差

を生ぜしめてゐる。すなはち名が表はす物は、實物それ自身ではなくて、人間がそれに細工を加へて造つた模型である。さうして、その細工といふのは、一つは、似たものの間の相違をけづりとつて、まつたく同一の物にすることで、他は、境界のないところに勝手に繩を張つて、領分境を明瞭ならしめることであるが、これだけの細工を施せば、實物はそれだけ變化して、もはや、實物のまゝの實物ではなく、單に取扱ひに便利な模型となつてしまふ。例へば、犬を見て、これに「犬」といふ名を附ける場合には、一匹々々の犬の間に見られる種々の相違を、ことごとくけづりけづつて、すべての犬に共通な性質だけを備へた模型に造り改め、それに犬といふ名を附けてゐるのである。實際に生きてゐるのは、ペスとか、シロとか、ポチとかいふ一匹一匹の犬であつて、大きいのや、小さいのや、黑いのや、白いのや、一匹ごとにそれ〴〵違つてゐる。犬といふ名が表はしてゐるやうな犬の模型は、むろん實際には存してゐない。猫でも人間でも、松でも梅でも、およそ普通名詞ならば、みな、こゝに述べたと同樣の方法で、實物から造り直した模型に附けた名前である。かやうな次第で、名が代表してゐるのは、實際に存する實物そのものではなくて、實際には存在してゐない模型であるが、これが、すなはち、物を考へるに用ひる道具として、言葉がもつとも有效である所以である。もしも、人間が、實物をたゞそのまゝに見るだけの力よりもたず、これを模型に造り直して揃へるといふ力がなかつたと假定したならば、「この犬は黑いが、あの犬は白い」といふやうな、簡單極まる文句さへも

いひ得ず、したがつて、それ以上にこみ入つた考へは、まつたくできなかつたに違ひない。されば、實物を模型化して、それに名を附けるといふ腦ずゐの働きは、實に、人間の文化發達の根柢の一つとみなしてもよいであらう。

なほ、物に名を附けて、その名の意味を正確に定めようとすれば、本來、境界のないところに、勝手に境を造らなければならない。これも一種の模型化である。もつとも、物の名を漠然たるまゝに使つてゐれば、その境を定めずにおいてもなんのさしつかへをも感ぜずにすむ。例へば、身體の部分についても、腹が痛いとか、背中がかゆいとか、手首を蚊にくはれたとか、腋の下に腫物ができたとかいつて、それですませてゐる間は、わざ〳〵境界を定める必要も起らないが、腹とはどこからどこまでをいふか、背とはどこからどこまでをいふかと、やかましく論じて、一字々々にたしかな定義を下さうとすると、ぜひとも境をこしらへてかゝらねばならぬ。すなはち、解剖學書の挿繪にある如く、人體の表面に幾つもの線を勝手に引いて、數多くの區域に分け、こゝが上腹部とか、こゝが下腹部とか、一區々々の領分を定める必要を生ずる。人間を裸にして、人體の實物を見ると、その表面には、なんら區域の境界はないのに、解剖學書の人體の圖を見ると、あたかも地圖の如く、一面に境界線を畫いてあるが、これが、實物と模型との相違である。物に名を附け、名に定義を下さうとすれば、よんどころなく、境のない所に境を造らねばならぬが、それだけの細工を加へた以上は、その物は、もはや、實物のまゝでなくて、一種の模型となり終つてゐる。

差別のある物は、これを差別的に取り扱ふのが當然であらうが、どこかに境界を設けぬと、差別的な扱ひはできない。例へば、汽車賃にしても、わづか四キログラムにたりない赤子も、百キログラムもある大男も、同じ金額を拂はせるのは、いかにもむちやのやうであるが、さりとて、體重に比例した賃金を拂はせることは、手數が大變で、むろん實行はできぬ。そこで、せめては、赤子と子供と大人との三階級に分けて、そのくらゐの程度で差別的の取り扱ひをしようとすると、赤子と子供との間にも、子供と大人との間にも、たゞ次第に移りゆきがあるだけで、どこにも判然たる境界はない。やむを得ず、五歳以下は無賃とか、十二歳以下は半額とか、かつてなところに境を設けて取り扱つてはゐるが、元來、そこに境界があるわけではない。およそ物に名を附け、名に定義を下さうとする場合には、いつも汽車の差別的賃金の定め方と同じく、天然には、なんの境界もないところに、便宜上、一本の線を引いて、それを境とみなすのほかはない。したがつて、いかなる定義にも、小數の、そのあみの目をくゞるものがあることは避けられない。哺乳類とは溫血・胎生で、體は毛髮を以ておほはれてゐる脊椎動物であるといふ定義に對し、かものはしのやうな卵生のものや、鯨のやうな毛の一本もないものがあつても、これは、もとよりやむを得ぬことで、定義とは、元來かやうな性質のものであることを承知しておく必要があらう。

（三）

物に名を附ける際には、一個々々の間の相違をけづり去り、似たものを同じものに造り直す

といつたが、數を數へるといふことは、同じ物が、いくつか揃つてゐる場合にかぎり、行はれ得ることである。ところで、私が、實物に直接にふれて經驗したところによると、世の中にまつたく同じだといふ物は、決して二つとはない。いかによく相似たものでも、よく調べてみると、その間には、かならず若干の相違がある。これを、相同じと見るのは、相違の點をけづり去つて揃つた模型に造り直したからである。一つ一つみな違つてゐる實物については、1＋1＝2といふこともできねば、1×2＝2といふこともできない。かやうな式が成り立つのは、たゞ人間が自分の腦ずゐの働きで造り上げた模型についてのみである。されば、數學なるものは、その性質上、全部、模型に對してのみ、よく當てはまるものであるが、模型に當てはまりさへすれば、數字の用はそれで充分であつて、實物には當てはまらぬといつても、そのために、數學の價値がさがるといふことは、もとよりない。

果物屋の店に、りんごの荷が到着した。中からは一つ〳〵大きさ、色、味、傷の有無、その他さま〴〵の點で、互ひに相異つたりんごが、數百個出てきた。かりに大きさによつて一列に並べたら、最大のものから最小のものまで、次第に移りゆくだけで、その間に、どこにも一足飛びのところはない。これが、實物そのまゝの姿である。ところが、果物屋の主人は、販賣の都合からこれを幾組かに分け、もつとも大きな組は一個十二錢、次の組は一個十錢、次は九錢、次は八錢と、一々札を立てて階段的に陳列した。かやうな取り扱ひを受けたために、各組のりんごは、一つ〳〵の間の相違は、まつたく無視せ

られて、みな同一の價値を附けられ、上の組の末席のものと、次の組の首席のものとの間には、天然には何の境界もないところへ、明らかな境を定められ、その境のあちらとこちらとでは、りんごの價が、一錢または二錢違ふものと定められた。これは、模型化せられたりんごの姿である。そこへ一人の客が來て、十二錢のを五つと、十錢のを十二買つて、一圓八十錢拂つて行つた。模型化せられてあつたために、計算がすこぶる容易で賣り手も買ひ手も大いに樂をする。もしも、模型化せられてゐなかつたならば、掛け算も寄せ算もできず、不便極まりないことであらう。されば、實際の取り扱ひにおいては、實物を模型化することは、やむを得ぬことであり、かつ、行へば極めて能率の高まることである。

人間が、言葉を用ひて物を考へるに當り、物に名を附けて、名にたよつて考へを進めてゆく際には、かならず、以上の果物屋の主人が、りんごに對して行つたのと、まつたく同じことをしてゐる。すなはち、實物を模型化して、取り扱ひを便利にする。あるひは、差違をけづり去つて、似た物を同じ物に造り直したり、あるひは、數多くの物をいくつかの組に分けて、組と組との間には、元來、境界などのなかつたところに、かつてに境界を造つたりする。言葉が、物を考へる道具として役に立つのは、實物に對して、かやうな細工を加へるからである。

（四）

以上述べたやうに、言葉にたよつて物を考へる際には、まづ、實物を模型化して、模型を實物のかへ玉に使つてゐるといふことは、私など

からみると、明らか過ぎるほど明らかに思はれるが、一般からは、ほとんど認められてゐないやうである。それはなぜかと考へるに、おそらく、なれ過ぎて、まつたく感じなくなつたためであらう。習慣といふものは恐しいもので、常に見なれたものは、それが、當然である如くに思はれ、それと異なつたものは、變に感ずる。例へば、宇宙間に地球が轉がつてゐるには、上もなく下もなく、横も縱もないわけであるが、常々地球儀や、地圖を見なれてゐるために、北極が上を向いてゐないと、なんだか間違つてゐるやうに感じ、オーストラリヤを上にした地球の圖を見ると、あたかも地球がさか立ちをしてゐるやうな氣がする。また、地球がその軌道を進んで行くには、いつも、ほゞ同じ速力で走り續けてゐるのであつて、決して、電車のやうに停留所で止まつたり、動き出したりするやうなことはないにもかかはらず、十二月三十一日と、一月一日との間を、年の境と定めておくと、長い間の習慣の結果として、その時が來ると、なんだか、すべての物が改まるかのやうな感じが生ずる。されば、言葉を用ひて物を考へるに當つて、實物を模型化する習慣が長く續くと、そのことには氣附かなくなり、模型が、すなはち實物自身であるやうに感じ、自分がかつてに造つた境界を、あたかも、初めからあつたもののやうにみなすにいたる。世の中には同じ物がいくつもあるやうに思つたり、名詞には、一々正確な定義が下せるはずのものと考へて、少しも疑はないのも、右の結果である。しかし、このことに氣附かない人は、世間にはすこぶる多いやうで、そのためになさずにすむべき議論が、

有名な學者たちの間に、激しくたゝかはされる場合も、決して稀ではない。

五　雪の映畫

雪の映畫を二つ見た。一つは「雪國」といふのであり、もう一つは「雪」といふのであつた。

「雪國」は、北國の人たちが雪と戰つてゐるやうすを映畫にしたものである。雪が降り出してから、それがだん〳〵積るところ、深い雪の中で生活してゐる人々、そのうちに春の光がさしそめて、雪どけの水が流れ出すところ、それを嬉しさうに見てゐる雪國の子供など、時間的順序をつけて取り扱つたものである。

「雪」といふのは、雪の景色をうつしたものではなく、雪の一片をとらへて映畫としたものである。たゞ一片の雪ではあるが、よく見るとまことにきれいな形をしてゐること、しかも、一片一片の雪が、それ〴〵違つた結晶をもつてゐること、その美しい雪が、數限りなく、天上から地上へ降つて來ることなどをうつしてゐる。

また、どうして雪の結晶ができるか、どんな場合に、どのやうな結晶となつて現はれるか、空中の溫度の變化、風の關係、水蒸氣の量、高度など、さま〴〵な條件によつて、雪の結晶がちがふわけを、映畫的技巧によつて、よくわかるやうに仕組んだものであつた。

空から降つて來た雪の一片を受け取つて、それをしさいに觀察してみると、その雪が、どこで、どのやうにして誕生したか、どんな天空を旅して降つて來たか、おのづから察知することができる、といふのである。

「雪は、空からのお手紙です。」

こんな言葉によつて、映畫は私たちに說明してくれた。わづかの雪片によつて、遙かに高い天空のやうすがこま〴〵とわかるとすれば、たしかに空からの便りに違ひない。「空からのお手紙」とは、うまくいつたものだ。

このやうに二つの映畫は、どちらも雪に緣のあるものであるが、私はあとの方の映畫に心がひかれた。ふんだんに降つて來る雪の中から、一片の雪をとらへて、それをいろ〳〵な角度から眺めてみようといふことは、つゝましやかな心なしにはできるものではない。野原の中で一本の草花を見出して、それをたんねんに寫生するのも、一匹の昆虫を永年かゝつて調べるのも、ごくさゝいな感情を拾ひあげて、一首の歌をよむのも、同じ心のあらはれであらう。

「雪國」の映畫も、決してわるいものとは思はないが、今少し深く見れば、更におもしろい場面が發見されるやうに思はれる。たとへば、吹雪などもその一つである。風にあふられた雪の群が、道を消し、木を折り、汽車を立往生させ、人を倒し、凍え死にさせてしまふことすらある。このもの凄い情況を映畫化することは、容易なことではあるまいが、伴奏の音樂や、場面の組み合はせと說明の言葉などによつて、かなり生き生きと表現することができさうである。

吹雪のすんだあと、雪の野原の表情を扱つても、おもしろいと思ふ。一面の銀世界となつた廣野を、第一の人が歩いて行く。その人の足跡をしるべに、第二の人が歩いて行く。やがて第三の人も通り、第四・第五の人も、同じ足跡をたよりに通つて行く。ぽつり〳〵と印した足跡

が、廣野を横ぎる一筋の道となる。その一筋の道を眺めると、一直線ではなく、くね〳〵とゆがんでゐる。歩く人は、おそらく、まつすぐに歩かうと思つたのではあらうが、いつのまにか曲つてしまふ。どうしてこんなに曲るのか、風に吹かれたからであらうか、足がつめたくなつて、立ち止つたためであらうか、それとも、心の中で考へごとをしてゐて、思はず方向が違つたものであらうか。

雪國で一番樂しいものは、何といつても、春先の雪どけの頃である。半年も雪にとざされてゐた地上に、ぽちつと黑い土地が見え始めた時の喜びは、たとへやうがない。子どもたちは、この黑い土の上に集まつて、土を足でとん〳〵踏んでみたり、しやがんで土の匂ひをかいだり、手のひらで土をなでてみたり、耳を地べたに近づけて、何か物音でも聞かうとしたりする。こんな場面を、映畫獨特の手法によつて、おもしろく編輯できないものだらうか。

綴り方の同じ文題でも、それを取り扱ふ人によつて、文章がいかやうにも書きあらはされる。どのやうに違つた文章でも、讀む人の心がひかれるのは、物事を溫く眺め得た人によつて描かれたものである。

六　二宮金次郎

（一）

二宮金次郎は、またの名を尊德といつた。今から約百五十年前の天明七年（西暦一七八七年）に生まれた。父は相模國の僻村（栢山村—現在の神奈川縣足柄上郡櫻井村栢山）の貧しい農民であつたが、隣人の間では、慈善心と公共心を

もつて知られてゐた。尊德は、十六歳の時、二人の小さな弟とともに、孤兒となつた。さうして、親族會議の結果、この貧しい一家族は離散することになり、長子の尊德は、父方の伯父、萬兵衛に引き取られた。こゝで、少年尊德の努力は、できるだけ伯父の厄介にならないやうにすることであつた。尊德は、まだ一人前の仕事のできないことをなげき、日中に仕上げることのできなかつたところを補ふため、夜は、おそくまで働くのが常であつた。この頃から、尊德は、自分は大人となつた時、目に一丁字もないあき盲にはなりたくないと思つてゐた。尊德は、「大學」といふ本を一部買ひ求めて、その日の手いつぱいの仕事を終へた後、深夜、熱心に勉强した。しかし、まもなく伯父は、尊德の勉强を發見して、たゞちに中止を命じた。といふのは、伯父自身の利益にならず、また、尊德自身のなんの實用にもならないことのために、貴重な油を使ふといふことは不經濟であるといふのであつた。尊德は、伯父のこのやうな憤りを、無理もないことだと思つた。さうして、かれは、かれ自身の油をともすことのできる日まで、勉强を中止した。春になつた。尊德は、川の堤防の上に、持主のないわづかな土地を耕し、そこにあぶらなの種子をまいた。さうして、休日のすべてをこの作物の栽培に捧げた。一年の終りに、かれは、大俵一俵の種子を收穫した。これは、かれの手づからの產物であり、正直な勞働の報償であつた。そこでかれは、その種子を近所の製油場に持參し、數升の油と取り換へてもらつた。今こそ、尊德は、かれ自身の油によつて、待望の勉强を再開することができるのであ

る。かれの喜びはいふまでもなく、かれは急いで夜の勉強を始めた。

しかし、伯父はまたいつた。自分が尊德を養つてゐるからには、その時間もまた、自分のものである。自分の家の者には、誰も、讀書といふやうなまうけにならない仕事をさせておくわけにはいかない、と。そこで尊德は、この命令に從ひ、一日の烈しい畠仕事のすんだ後にも、むしろ織りや、わらぢ作りをまでした。さうして、その時以來、かれの勉強は、毎日、山へ乾草や、薪を採りに行く往復のみちすがら、なされたのであつた。

しかし、休日だけはかれのものであつた。あぶらなの經驗は、熱心な勞働の價値をかれに敎へた。かれは、その經驗をさらに大きな規模で、再び經驗したいと思つた。そこで尊德は、自分の村の中に、近頃の出水で沼地と化した土地を發見した。かれに、休日を有益な目的のために用ひることのできるすばらしい機會が、到來したのであつたのである。すなはちかれは、池を乾してその底を平にし、それを小さな稻田となるやうに整へた。農民らは、苗の餘りはいつも棄ててしまふので、その棄てた餘りのなかから、若干の苗を拾ひあげて、そこに植ゑつけ、一夏にわたる注意深い配慮を、その上に加へた。その結果、秋には、一俵の黃金の穀物を收穫した。自己の謙虛な努力の報償として、生まれて始めて、自己の生活の資を得たのである。わが少年孤兒の喜びは、まつたく想像に餘りがあつたであらう。かくてその收穫した米は、かれが多事な生涯を開始したその基本金となつた。誠實にして獨立の人であつたかれは、自然は正直

な勤勞の子に對して眞實である、といふことを學んだ。さうして、かれの後年の諸改革は、自然は、その法則に從ふ者に豐かに報いるといふ、この簡單な原則にもとづいたものであつた。

數年後、尊德は伯父の家を去つた。さうして、かれは、村の廢地から收穫したわづかな米を持つて、多年住む人もない祖先からの家へ歸つて行つた。

そこで尊德は、村の丘陵の傾斜地、河岸の空地、路傍、濕地等を、手あたり次第に開拓した。かくて、數年ならずして、かれは少なからぬ資產を有する人となつた。また、そればかりではなかつた。その模範的な節約と勤勉とによつて、近隣全體から尊敬されるところとなつた。

（二）

尊德の名聲は日々に高まり、尊德の眞價は、當時、幕府の老中であつた領主、小田原侯大久保加賀守忠眞（たゞざね）に認められた。領主は、かくもすぐれた人物を、片田舍に埋もれさせておくべきではないと思つた。しかし、階級差別の極めて強かつた當時の社會では、農民を一やく有力な地位につけるといふことは、なか〳〵容易なことではなかつた。

ちやうど、その頃のことであつた。小田原侯の封地のうち、下野（しもつけ）國に物井、横田、東沼といふ三村があつた。この三村は、かつて戶數四百五十を數へ、年貢米一萬俵を領主に納めてゐた。しかるに、度々の天災と、數代にわたる村人の怠慢とによつて、田野は侵され、むじなと狐とは、そのすみかを人と共にするやうになつた。したがつて、人口は昔時の三分の一となり、荒廢した土地と、疲弊した農民から取り立てので

きる年貢米は、高々二千俵であつた。貧乏ととも に道徳はすたれ、かつて繁榮したこの村々は、今は賭博者の巣くつであつた。もちろん、その復興は、しば〳〵試みられはした。しかし、村民そのものが、手におへない盜人や怠惰者であつては、金錢も權力もなんの效果はなかつた。血氣にはやる領主であれば、この全人口に、立ち退きを命じ、より道徳的な、新しい勞働力を輸入して、田畑の復興を始めたかもしれない。

しかし、小田原侯は、この村々の復興を、尊德にさせたいと思つた。すなはち、小田原侯は、もし尊德が、これらの諸村をもと〳〵の富裕と繁榮とに恢復することができたならば、國内のすべての荒廢村の恢復を委ねよう、さうして、それらの村の正當な指導者として人民の前に立たせ、適當の地位を與へようと、考へたのであつた。

が、百姓の尊德は、自分はそのやうな公共的性質の仕事には、まつたくの無能力者であるとして、かれに與へられたこの名譽をこばんだ。尊德は、ほんたうに一介の貧しい農夫であつた。だから、かれが、一生の間に成就しようとするところのものは、たか〳〵、かれの家産のばんくわいでしかなかつた。しかし、小田原侯は、三年の長い間、尊德に對し、この村々の復興をかれにさせたいといふ要求を主張してやまなかつた。一方、尊德は、草ぶき屋根の下で、平和な家庭生活をいとなみたいといふ、かれの謙遜な願望を、固く守つて讓らなかつた。しかしながら、主命は、もはやもだすことができなかつた。そこで尊德は、復興すべき諸村の狀態を、愼重に踏査したいと思つた。さうして、まづ尊

德は、約二百粁の道程を、歩いて出かけた。かれは、數ケ月の間、その地の民家に留まり、家から家へ村民を訪問して、愼重にその生活狀態を調査した。また、荒地の範圍、土質及び灌漑、排水の方法等について、綿密な研究を行ひ、荒廢地域の復興は、どうすれば可能であるかにつき、完全な見積りを作るため、あらゆる資料の蒐集に努めた。

その結果としての、尊德の小田原侯への報告は、はなはだ悲觀的なものであつた。しかし、事態は、かならずしも絶望ではなかつた。「眞の仁術(愛の術)によつてのみ、あの窮民に平安と繁榮を再復することができる。」と、かれはその報告の一節において述べた。「金錢を與へ租稅を免除するのは、村人の困窮を救助する途ではない。むしろ、一錢をも與へないことこそ、かへつて、救濟の祕訣である。援助は、ただ、どんよくと無賴を招いて、民の間にあつれきの源泉を起させるやうなものである。荒蕪を開くには、荒蕪の力を以てし、衰貧を救ふには、衰貧の力を以てしなければならない。もし、荒田一段につき、二俵の產米があるとすれば、一俵は民の食糧とし、一俵は殘餘の荒蕪地の開田料とすべきである。かうして、愛と、勤勉と、自助——これらの諸德の嚴格な勵行によつてのみ、これら荒廢諸村の復興に希望が持たれるのである。今日より十年、余が眞心を盡し、忍耐をもつて、この事業に專念したならば、これら諸村をもとの繁榮に再復させることは、疑はないところである。」と。

まことに、大膽な、道理にかなつた、しかも、費用を要せぬ計畫であることよ……。かかる計

悲に贊意を表しない者が、いつたいあるであらうか。この農村復興計畫は、道德力を、經濟問題の諸改革における主要な要素としたものであつて、これまでに、ほとんど類例を見ない提案であつた。それは、まつたく、信仰の經濟的適用であるともいへよう。尊德には、このやうな、淸教徒の血の通つてゐるところがあつた。

尊德のこの提案は、直ちに採用された。さうして、わが農民道德家尊德は、十年間、これら諸村の事實上の長官となつた。しかし尊德は、先祖の家產の復興を、中途で放棄することが、悲しかつた。かれのやうな熱誠の人にとつては、どのやうな事業に對しても、全心を打ち込まないといふことはできなかつた。今や、公の事業に着手する以上、個人の利害は、ぜん〳〵無視せられなければならなかつた。すなはち、公私の二つの事業を同時に行ふことは、許されなかつた。「萬家を全くせんとして一家を廢す」と、尊德は、このやうに自分自身にいひきかせた。かれは、妻の同意を得て、かれ自身の宿望をぎせいにし、その決心をことゞく、先祖の墓前に報告した。さうして、家をたゝみ、他の世界にでも赴く人のやうに、背後の舟を燒いて故鄕を去り、かれが藩侯に對して大たんにも提案した、この大事業に突入した。

（三）

では、尊德は、いかにして、土地の荒廢と、人心の浮薄とに對して戰つたであらうか。

尊德には、術策と政略とは皆無であつた。かれの簡單な信仰は、むしろ、この二つを用ひないことであつた。すなはち、至誠をもつてすれば、天地もこれがために動くと。さうして、ま

づ何よりも、きびしい自己批判が、その先決であつた。尊德は、あらゆる美味佳肴をとらず、衣服も綿衣のほかは着用しなかつた。また、決して、民家では食事をせず、一日わづかに二時間眠り、部下の誰よりも先だつて畑に出で、すべての者の立ち去るのをまつて去るのが、常であつた。かくて、貧しい村民に臨むに、もつとも困難な運命を、尊德自身まづたへ忍んだのである。さうして、かれは、村人を批判するに當つては、動機が眞實であるといふことを、その基準とした。尊德のいふ最善の勞働者は、もつとも多くの仕事をする者ではなかつた。もつとも高貴な動機をもつて仕事をする者であつた。

ある一人の男が、もつともはげしい勞働者であり、三人前の仕事をする人間であり、しかも、氣立てがよいといふ理由で、多くの人たちから、その表彰を推薦せられてゐた。しかし、わが農民長官尊德は、このやうな推薦に對して、長い間無關心であつた。が、この男に適當なはうびを與へることを、再三再四役人たちに迫られた尊德は、やむを得ず、その男を自分のもとに呼び寄せた。さうして、その男が、他の役人の前でしたと同じしかたで、その日一日の勞働を、自分の前でするやうにと要求した。すると、その男は、直ちに、そのやうな力のないことを自認し、その上、見廻りの役人の眼をあざむき、三人分の勞働ができると、よそほつてゐたことを白狀した。尊德は、自分の體驗によつて一人の人間の勞働力の限度を知つてゐた。かれは、このやうなどんな報告によつても、欺かれなかつたのであつた。かくて、その男の僞善には、しかるべき訓誡が與へられて、畑に追ひ返され

た。

尊德の部下の勞働者の中に、ほとんど一人前の仕事さへもできないやうな一人の老人がゐた。老人は、いつでも木株を掘つてゐた。この仕事は、骨の折れる仕事ではあつたが、あまり見ばえのする仕事ではなかつた。老人は、他人が休んでゐる時でも、自分自身の受持を、さも滿足さうに、その仕事にはげんでゐるのが常であつた。人は、この老人を木株掘りと呼んで、少しも顧みなかつた。しかし、尊德の眼は、常にこの老人の上にあつた。ある勘定日のことであつた。尊德は、いつものやうに、それ〳〵の勞働者に對して、仕事の勤惰に應じて審判を下した後、この木株掘りの老人に、最高の名譽であるはうびを與へた。これは、勞働者一同の大きな驚きであつたが、誰よりも當人ほど、ひどく驚いた者はなかつた。かれは、規定の賃金以外に、十五兩をもらふことになつた。勞働者は一日二十文をうるに過ぎなかつた當時のことと、これは、まつたく莫大な金額であつた。

「私は、だんな樣……。」

と老人は叫んだ。

「私は、年寄りでございます。一人前の賃銀にも當りません。私の仕上げた仕事は、はるかに他人に及ばないものでございます。だんな樣は、まちがつておいでになるのに相違ありません。心苦しくて、この金子はいただくわけにはまゐりません。」

「いや、さうではない。」

と、尊德はきつぱりといつた。

「おまへは、誰も他人の働かうとしないところで働いた。人にどう見られようとかまはず、

ただ、しんけんにわれらの村々につくすことだけを心掛けた。おまへは木株を除いてじやま物を片づけた。そのために、われ〳〵の仕事は非常にはかどつた。もし、おまへのやうな者をほめなければ、以後、何をもつて土功を擧げよう。はうびは、天がおまへの正直を賞して下したまうたものである。感謝をもつて受け、老いの身に慰めを加へることに用ひるがよい。おまへのやうな正直を認めることほど、私を喜ばせるものはない。」

老人は、子供のやうに涙を流して泣いた。

しかし、尊德のこのやうなやり方に、反對する者も多くあつた。村民の一人に、手におへぬ怠け者があつた。この男は、尊德の計畫のすべてに對する、激しい反對者であつた。この男の家は倒れさうになつてゐたが、この男は、自分の貧乏は、たしかに尊德の新しい計畫の弱點を示すしるしであるとして、このことを いつも、隣人に語るのであつた。たま〳〵尊德の家僕が、この男の厠(かはや)にはいつたところ、厠は、多年手を加へなかつたため、ひどくくさつてゐて、ちよつとさはつただけで、地に倒れてしまつた。この男はひどく怒つた。さうして、かれは、棍棒を持つて來て、家僕が過ちをわびるのも聞かず、横打し續け更に、家僕のあとを追つて、尊德の家までやつて來た。そこで、尊德の門前に立ち、集まつて來た多くの人々に、自分のかうむつた大きな災難と、この地方に平和と秩序とを與へることのできない尊德の無能力とを、並べたてた。尊德は、できるだけ柔和な態度をもつて、家僕の過ちをわびた。それから、言葉を續けていつた。

「それほど、厠が倒れさうになつてゐたからには　おそらく、すまひも完全ではあるまい。」
「もと〳〵、私は貧乏人だから……。」
と、その男は不愛想に答へて、さらに、
「だから、すまひを修復することができない。」
といつた。尊德は、
「さうか。」
と、やさしくいつて、
「それなら、人をつかはして、おまへのすまひを修復してやつたらどうか。おまへは、それを承知してくれるか。」
とたづねた。かれは、びつくりするとともに、すでに、羞恥の心にとらへられて、次のやうに答へた。
「そのやうな御親切なお言葉に、背くことができませうか。私には、あまりにもつたいない御慈悲でございます。」
翌日、尊德の部下は、新築の用意一切を整へて、かれの家へ行つた。さうして、數週日にして、近邊では見られないやうなりつぱな家を一軒竣工した。もちろん厠も、修繕された。かくて、それ以後は、この男ほど、尊德に對し忠實であつた者はなかつた。後年、かれがこの時のことを語るたびに、涙を流しながら、
「あれほど恥しかつたことはなかつた。」
といつた。
また、ある時のことであつた。村民の間に不滿がみなぎり、いかなる仁術も、これを抑へることができなかつた。しかし、尊德は、すべてかゝることは、自己の不德のいたすところであると考へてゐた。さうして、「天は、これによつて、わが誠心の至らざるを罰したまふ。」と、か

れ自身に語つた。ある日、尊德は、突然村民の間から、姿を消してしまつた。村人たちは、いづれも不安な氣持で、尊德の居所を探し求めた。さうして、幾日か後、尊德は遠方の寺に行つてゐることがわかつた。尊德は、民を導くのに、なほ多くの至誠が與へられるやうに、そこで祈念默想して、二十一日間の斷食修業をしてゐたのであつた。村人たちは、人をやつて尊德の歸村を願つた。尊德の不在は、これら諸村の無政府狀態を意味してゐた。村人たちは、今こそ、尊德なくしては、やつていくことのできないことを知つたのであつた。三七日の斷食滿願に及んで、尊德は、わづかの食事をもつて體力をつけ、四十粁の道程を歩行して、村に歸つて行つたのであつた。

(四)

數年にわたる不眠不休の努力——勤勉と節約と、仁術とをもつて、荒蕪は、すつかり追ひはらはれてしまつた。さうして、かなりの生產力ともいふべきものが、よみがへり始めた。尊德は、他國から入植者を招き、土着の住民を遇するよりも、もつと深い思ひやりをもつて、かれらを優遇した。さうして、村の恢復と富裕とをはかつたのであつた。だから、尊德にとつては、どこかの地域が、完全に恢復したといふことは、ただ、土地が再び豊沃になつたといふことではなくして、「十年の蓄へ」が出來たといふことであつた。これは、「國に九年の蓄へなきを不足といひ、六年の蓄へなきを急といひ、三年の蓄へなきを國その國に非ずといふ。」「禮記」の言葉に、文字どほりに從つてゐたのであつた。

しかし、饑饉は、このやうな蓄へができない

以前に始まつた。天保四年（西暦一八三三年）は、東北地方一帶にとつて、大きな困難の年であつた。この年の夏、尊德は、茄子の味が秋茄子のやうであることから、「これは、明らかに、太陽がすでにこの一年の光を發し盡したしるしである。」といつて、その年の凶作を豫言した。さうして、尊德は、直ちに民に命令を出して、一戸に一段の割合で稗を播かせ、その年の米の不足を補はせようとした。尊德の豫言はまさに適中した。すなはち次の年、近隣の諸國は、到るところ饑饉におそはれた。しかし、尊德の管下の三村は、たゞの一家も缺乏に苦しむ者はなかつた。尊德は、また、豫言者でもあつたのである。

約束の十年の終りには、かつて國内でもつとも貧しかつたこの三村が、全國でもつとも秩序整然とした、もつとも蓄へのある地方となつた。さうして、自然の肥沃の程度からいふ限り、生産力のもつとも大きな地方となつたのである。ただ、その村々が、さきの繁榮の日のやうに、米一萬俵の收穫があるやうになつたばかりではなく、窮乏の年に備へるために、穀物の充滿した數棟の穀倉をさへもつに至つた。なほ、喜んで附言したいことは、尊德自身もまた、數千金を蓄へて、後年、それを慈善事業のために、をしみなく用ひるに至つたといふことである。

尊德の名聲は、今や、遠く廣くひろがつた。諸侯は、國の四方八方から使者を遣はし、その領内の荒廢村の復興のために、彼の教示を求めた。

尊德の最初の公共事業の成功が、當時の怠惰な社會全體に對し、非常な影響を與へたのであ

つた。

七　少年筆耕

ギュリオは、フロレンスの十二になる上品な少年で、鐵道會社の雇をしてゐる人の長男でした。ギュリオの父は、家族が大勢ですのに、給料が少いものですから、かつ〳〵と、切りつめた暮しをしてゐました。けれども父は、ギュリオをかはいがつて、ずゐぶん優しくあまやかして——なんでもいふままにさせておきましたが、たゞ、學校に關したことだけは、きびしく世話をやきました。といふのは、早くギュリオが地位を得て、暮しを助けることができるやうな身分に、なつてもらはなければならなかつたからです。それで、ギュリオは、よく勉强しました。けれども、父は、もつと〳〵勉强するやうにと、いつも勵ましてをりました。

父は、だいぶ歳をとつてゐました。それに、あまり苦勞が多過ぎるので、年よりもふけてをりました。しかし、一家を支へて行かなければなりませんので、その日〳〵の勤めのほかに、方々から書き物などを受け合つて來て、夜おそくまで、テーブルに向かつてをりました。このごろでは、雜誌や、分册の書物などを發行する家から、包み紙の上に讀者の宛名を書くことを、引き受けて來ました。それは、大きなちやんとした字で、五百枚書くごとに、三リイラづつまうけるのです。しかし、この仕事はよほどつらかつたとみえて、父は、ともすると食事の時などに、家族の者にこぼしました。

「どうも、目が、だん〳〵惡くなるやうだ。」

とか、

「夜の仕事で、わたしの命はちゞんでしまふやうだ。」

とか、つぶやきました。

ある日、ギュリオは、おとうさんにいひました。

「おとうさん。ぼくにかはりに書かしてください。だいぢやうぶですよ。おとうさんと同じやうに、うまく書けると思ひますから。」

しかし父は、答へました。

「いや、おまへは、勉強しなければいけない。學校の方が、わたしの包み紙よりだいじだ。一時間でもおまへの時間をとつては、わたしの氣がすまない。志はありがたいが、してもらはうとは決して思はないから、二度とそんなことをいつてくれるな。」

ギュリオは、いひ張つたところでむだなことを、よく知つてをりましたから、強ひてもいひませんでしたが、その考へは棄てませんでした。

ギュリオは、眞夜中になると、父が、書くのをやめて、仕事部屋から、寢間へ行くのを知つてをりました。時計が十二時を打つや否や、椅子を後へずらす音がして、さうして、父の靜かな足音がするのを、聞いてをりました。

ある晩、ギュリオは、父が寢てしまふのを待つてから、そつと着物を着て、小さな仕事部屋へぬき足で行きました。ランプをつけ、積み重ねた白い包み紙と、宛名の名簿とがおいてあるテーブルに向かつて、父の手をそつくりまねて、書き始めました。ギュリオは、嬉しいやうな、またいくらかこはいやうな氣持で、一生けんめいに書き續けました。包み紙はだん〳〵たまりました。ギュリオは、時々ペンをおいて手をこ

すつては、また、せつせと書きました。耳をすましたり、につこりしたりしながら。さうして、百六十枚——約一リイラ分だけ書きました。そこでギュリオはやめて、ペンをおき、あかりを消して、足をつまだてて、寢床へ歸りました。

翌日の朝飯の時に、父は、上機嫌でギュリオの肩を叩きながらいひました。

「おい、ギュリオ、おとうさんは、おまへが思つたよりえらい働き者だぞ。昨夜は、二時間の間に、いつもより三分の一だけよけいに仕事をしたよ。わたしの手はまだ〳〵達者だ。目だつてまだ〳〵確かなものだ。」

ギュリオは、だまつてをりましたが、滿足しました。

この結果のよかつたのに勵まされて、夜の十二時が鳴ると、ギュリオは、また起きあがつて、仕事にかゝりました。かうして、幾晩か續けました。父は、なんにも氣が附かずにをりましたが、たゞ一ど、晩飯の時に、

「どうも不思議だ。このごろ、うちではずゐぶん油がいる。」

と、驚いた聲を出しました。それを聞くとギュリオは、ぎよつとしましたが、話はそれきりになつて、父は夜の仕事に移りました。

ところが、かうして毎晩途中で起きるために、ギュリオは、充分な安眠が得られませんでした。朝、起きる時には疲れてゐますし、晩、復習をしてゐる時には、目をあいてゐることが苦しくなりました。ある晩、生まれて始めて、ギュリオは筆記帳の上で居眠りをしました。

「こら、しつかりせんか、しつかりせんか。」

と、おとうさんは、手を叩きながら叫びました。

「勉強するんだ。」

ギュリオは身振ひして、また勉強を始めましたが、次の晩も、その次の日も、毎日毎晩同じことが起りました。書物の上にうつぶして眠つたり、いつもより朝寢をしたり、復習をするのに元氣がなかつたり、勉強がいやになつたやうに見えたりしました。父は、それを見て、まじめにいろ〳〵と考へて、しまひには叱るやうになりました。

「ギュリオ。」

と、ある朝、父はいひました。

「おまへは、まつたくわたしを氣狂ひにしてしまふ。おまへは、もうもとのやうなおまへぢやない。氣をつけなさい。この一家の希望は、みな、おまへの身にかゝつてゐるのだぞ、私は氣にいらない。わかつたか。」

このこゞとは、實際、今までのこゞとのうちで、一番ひどいものでしたから、ギュリオは、困つてしまひました。

「さうだ。」

と、ギュリオは、心の中でいひました。

「ほんたうだ。こんなことを、いつまでも續けてゐるわけにはゆかない。こんなごまかしは、やめにしなければいけない。」

ところが、その同じ日の夕方、食事の時に、父は、たいそう樂しさうに、にこ〳〵しながらいひました。

「どうだい、今月はな、包み紙の書き賃を、先月よりも、三十二リイラよけいにまうけたぞ。」

さういつて、食卓の下から、この特別なまうけを、子供たちといつしよに祝はうと思つて買つて來た、お菓子の袋を出しました。みんなは、

手を叩いて喜びました。それを見ると、ギュリオは、また、氣をとり直し、勇氣を起して、心の中でいひました。

「いや、晝の間も、もつとよく勉強しますけれど、夜は、おとうさんや、ほかのみんなのために、やつぱり働きます。」

その時、父は、言葉を續けていひました。

「三十二リイラよけいなんだ。私は、もういひ分なしぢや。たゞこの子だけが。」

と、ギュリオを指さしながら、いひました。

「どうも、わたしの氣にいらない。」

ギュリオは、默つてこのこゞとを受けながら、あふれ出ようとする涙を、むりにおさへてをりました。

そのうちに、疲れがだん〳〵加はつて、どうにもやりきれないやうになりました。かうして、二ケ月たちました。父は、やはり息子を叱り續けて、じつと、見る目つきさへ、次第に怒りを增してくるやうになりました。ある日父は、學校の先生のところへきゝに行きました。

先生は、次のやうにいひました。

「えゝ、進むことは進みますよ。もと〳〵りこうなたちですから。しかし、以前のやうに本氣ではなくなりましたね。眠たさうで、あくびばかりして、氣が散つてゐます。綴り方なども、短かいものを大急ぎで書いてしまふといつたふうで、字なども惡くなりました。もつと、よくできるはずですがねえ。」

その晩、父は、ギュリオを側へ呼んで、これまでよりももつとまじめな言葉で、いつてきかせました。

「ギュリオ、おまへは、わたしが一家のために、

どんなに、骨を折つてゐるか、どんなに命をちゞめてゐるか、知つてゐよう。それだのにおさへは、わたしの苦勞をなんとも思はない。おまへは、わたしのことも、兄弟のことも、おかあさんのことも、なんとも思つてゐない。」

「いゝえ、そんなことはありません。おとうさん、どうぞ、そんなことはいはないでください。」

と、ギュリオは叫び、何もかもいつてしまはうと口を開きかけました。ところが、父はさへぎつていひました。

「おまへにも、家の事情はわかつてゐよう。みんなが、本氣になつてつくしてくれなければならないことも知つてゐよう。わたしは、仕事を二倍にして働いてゐる。今月は、鐵道會社の方から、百リイラの賞與をもらふつもりで、あてにしてゐたが、それも、今朝になつて、なんにももらへないことがわかつた。」

それを聞くと、ギュリオは、口許まで出かけてゐた言葉を、またおさへて、心の中で、きつぱりと繰り返しました。

「いや〳〵、おとうさん、ぼくは、なんにも話しますまい。おとうさんのために働くことができるやうに、やはり祕密を守りませう。悲しい思ひをおさせするのは、他のことで償なひます。學校でも充分に勉強して、及第しますが、何よりだいじなことは、おとうさんに手傳つて暮しを助けることと、おとうさんの命をちゞめてゐるお疲れを、少しでも輕くしてあげることです。」

ギュリオは、それから、また、二ケ月も續けました。ギュリオの方では、一生けんめいに努

めましたが、父は、ひどく叱つてばかりをりました。ところが、一番わるいことは、父が、だん〳〵ギュリオに冷淡になつたことです。今はもう、とても見込みのない腰拔け息子だとでも思ひ、めつたに口もきかなければ、その目をさへ避けるやうになりました。ギュリオは、それに氣附いて、心を痛めました。さうして、さういふうちにも、悲しさと疲れのために、體はやせ、顏色は靑ざめて、勉强の方もだん〳〵落ちてきました。自分でも、いつかはこんなことはやめにしなければならないと、よくわかつてゐましたので、毎晩、

「今夜こそ、もう起きないぞ。」

と、心の中でいひましたが、時計が十二時を打つと、心が責められてきました。そのまゝ寢床に寢てゐることは、義務を怠ることのやうに、父や家の者から一リイラづつ盜むことのやうにさへ、思はれてきました。そこでまた、起きありながら、かう考へました。

「いつかは、父が目を覺まして、自分を見附けるであらう、さもなければ、何かふとしたことで、包み紙を數へなほしでもすることがあつて、このごまかしを發見するであらう。さうすれば、しぜんと何もかもわかることになるであらう。」

さう考へて、ギュリオはまた續けました。

ところが、ある晚、食事の時に、父は、ギュリオのことで、ひどく思ひ切つたことをいひました。母はギュリオを見つめました。いつもよりも、ひどく氣分が、惡さうで、弱つてゐるやうにみえましたので、母は、

「ギュリオ、おまへは病氣だね。」

それから、父の方へ向いて、心配さうに、
「ギュリオは病氣ですよ。ごらんなさい、あんなに青い顔をしてゐるのですもの。」
父は、じろつとギュリオを見つめて、
「病氣になるのも自業自得だ。よく勉強するかはいゝ子であつた時分には、こんなことはなかつた。」
といひました。
「だつて病氣ですもの。」
と、母が聲を高めていふと、
「なんだつて、あいつのことなんか、わたしは、もう心配しやしないよ。」
と、父は答へました。
この言葉を聞くと、かはいさうにギュリオは、胸を刺されるやうな氣がしました。
「あゝ、おとうさんは、もう何も心配してくださらない。前には、ぼくが、せきを一つしても、ふるへてゐたのに。おとうさんは、もうぼくを愛してはくれないのだ。まつたくそれに違ひない。おとうさんの胸の中には、もうぼくは生きてゐないのだ。あゝ、おとうさん。」
と、ギュリオは、苦しさに胸のつまる思ひをしながら、心の中でいひました。
「もう何もかもおしまひだ。ぼくは、おとうさんにかはいがられずには、生きてゐることができない。ぼくは、それを取り返さなければならない。何もかもお話ししよう。もうおとうさんをだましはしない。もし、おとうさんが、もう一度愛してさへくれゝば、おとうさん。どんなことがあらうとも、ぼくは、もとどほりに勉強します。おゝ、今度こそぼくは、ぼくは、固く〳〵決心しよう。」

ところが、その夜になると、今までの習慣で、起きあがりました。さうして、長い間、滿足したり、びく〳〵したりしながら、こつそりと働いてゐた小さな部屋へ行つて、暇乞ひをして來たくなりました。ギュリオは、またとうとう仕事部屋にはいりました。さうして、ランプのついた小さなテーブルを見たり、白い包み紙を見たり、また、今はそらで覺えるやうにまでなつた町の名や、人の名が書いてある讀者名簿を開いてみたりしてゐると、ギュリオは、にはかに、たまらなく悲しくなつて、いきなりペンを握つて、いつもの仕事を始めようとしました。ところが、その手をのばした拍子に、一冊の書物に當り、書物はばたりと下に落ちました。はつと思ふと、血が、一時に胸にのぼつて來ました。もし、父が目を覺ましたらどうだらう。何も、惡いことをして、見つけられるわけではないが、自分でも、何もかも話してしまはうと決心したことではあるが、暗闇の中を近附いて來る足音が聞えたら……。このしいんとした中で見附けられたら……。おかあさんが目を覺まして、びつくりなさるであらう。さうして、今までは思ひも附かなかつたが、こゝで何もかも見附かつたら、おとうさんは、どんなにかきまりが悪く思はれるであらう……と、いろ〳〵な考へが一時に起つて、ギュリオは、たまらなく恐ろしくなりました。で、じつと息をこらしながら、耳を傾けました。が、何の音も聞えません。後の戸のかぎ穴に耳をつけてみましたが、何にも聞えません。家中が、しいんとして眠つてをりました。ギュリオは、やつとまた、氣を落ちつけて書を始めました。包み紙は、次第に重なつて

ゆきます。外では、淋しくなつた往來をこつこつと歩く巡査の靴の音が聞えました。それから、馬車の響が次第に遠くに消えて行きました。やがてちよつとまをおいて、一台の荷馬車の音が、がた〳〵とのろく通りすぎました。それからは、まつたくしいんと靜まり返へつて、時々、犬の遠吠えが聞えるばかりでした。さうして、ギュリオはせつせと書いてをりました。すると、いつのまにか、父が後に立つてゐました。父は、書物の落ちる音を聞くと起きあがり、長い間じつと待つてゐたのでした。荷馬車のがた〳〵いふ音が、父の足音や、戸のあく音を消してしまつたのでした。父は、そこに來ると、その白い頭をギュリオの小さな黒い頭の上にかゞめて、ペンが包み紙の上を走るのを見てをりましたが、何もかも、見當が附き、すべてが思ひ出されて、いつさい合點がいつたのでした。と、身を切られるやうな後悔の念が起きると同時に、たまらなくかはいく思ふ心が、胸いつぱいになつて、そのまゝ、わが子の後に、息をつめてじつと身動きもせずにをりました。と不意に、ギュリオは、きやつといふ叫びをあげました。父の二本の腕がぶる〳〵ふるへながら、ギュリオの頭を抱いたからです。

「あゝ、おとうさん、許してください。」

と、ギュリオは、すゝり泣きながら叫びました。

「おまへこそ許しておくれ。」

と、父は、ギュリオを抱きしめました。

「みんなわかつた、わかつた。私こそ、私こそ、おまへに許してもらはなければならない…。さあ、さあおいで。」

といつて、父は、ギュリオを抱へるやうにしな

「がら、母の寢台の側へ連れて行きました。さうして、目の覺めてゐた母の腕の中へ、おしやりながらいひました。

「このかはいゝ、かはいゝ子を抱いておやり。三月の間、眠らないで、わたしのために働いてくれたのだ。それだのにわたしは、怒つてばかりゐた。うちのために働いてゐてくれたのに。」

母は、ギュリオを胸にかたく抱きしめました。じつと抱きしめたまゝ、ものをいふ力もありませんでした。しばらくして、やつといひました。

「さあ、行つておやすみ、行つてゆつくりおやすみ。あなた、連れて行つてやつてください。」

父は、ギュリオを母の腕から抱き取り、部屋へ連れて行きました。寢床に寢かしてからも、ギュリオをいたはりながら、枕やふとんの工合をなほしてやりました。

「おとうさん、ありがたう。」

と、ギュリオはいひ續けました。

「ありがたう。どうぞ、もう行つてお休みください。もうたくさんです。どうぞ行つておやすみください、おとうさん。」

けれども父は、ギュリオが眠むるのを見たいと思つたのでせう、寢台の側に腰をおろして、ギュリオの手を取つていひました。

「ギュリオ、お眠り、お眠り。」

ギュリオは弱つてゐたものですから、とうとう眠つてしまひました。幾月目かで始めて、靜かな眠りを樂しみながら、うれしい、うれしい夢を見續けてをりました。さうして、目をあいた時には、太陽が明かるく輝いてをりました。さうして、その時始めて氣が附いてみると、自

分の胸に近く、小さな寝台の端に、父の白い頭がのせられてをりました。

父は、かうして一夜をすごしたのでした。額を息子の胸のところへつけたまゝ、眠つてゐるのでした。

昭和二十一年十月三十一日　翻刻印刷
昭和二十一年十一月二十日　翻刻發行
（昭和二十一年十月三十一日文部省檢査濟）

高等科國語二　第一學年後期用
新　定價　金壹圓參拾錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 31, 1946)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
發行所　東京書籍株式會社